

## 新学習指導要領の実施に向けた準備状況

学校教育課

### 新学習指導要領全面実施

小学校 令和2年度

中学校 令和3年度

#### 新学習指導要領を踏まえた授業への対応

- ・ 県教育課程研修会（各教科等）への参加及び校内教員への周知
- ・ 県事業「活用力アップにつながる授業改善事業（B・P・L・A・N）」の活用
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた日々の授業の見直し、改善
- ・ 学習評価についての研修会への参加（12月～1月）

#### 教育課程への対応

- ・ 授業時数確保のための時間割の試行
- ・ 年間指導計画の作成（本年度中）

#### 新教科書への対応

- ・ 令和2年度使用教科書の教材研究
- ・ 教科書活用研修（国語、理科、英語）の実施（1月～2月）

#### 外国語・外国語活動への対応

- ・ 外国語担当者研修会の実施
- ・ 英語専科指導教員の配置と活用
- ・ A L T の効果的活用

#### プログラミング教育への対応

- ・ 市内教員を対象にした研修会の実施
- ・ 各学校で使用できるプログラミングソフト、プログラムの配布
- ・ 各学校での実践

## 学習指導要領改訂の背景

人工知能が進化して、  
人間が活躍できる職業は  
なぐなるのではないか。

今学校で教えていることは、  
時代が変化したら  
通用しなくなるのではないか。

子供たちに、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、  
**未来の創り手となるために必要な資質・能力を  
確実に備えることのできる学校教育を実現する。**

**よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を作るという目標を学校と社会が共有して実現**

社会や産業の構造が変化し、質的な豊かさが成長を支える成熟社会に移行していく中で、私たち人間に求められるのは、定められた手続を効率的にこなしていくにとどまらず、感性を豊かに動かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自らの能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことであるということ、そのためには生きて働く知識を含む、これからの時代に求められる資質・能力を学校教育で育成していくことが重要であるということ、学校と社会とが共通の認識として持つことができる好機にある。

**学校教育のよさをさらに進化させるため、学校教育を通じて子供たちが身に付けるべき資質・能力や学ばべき内容などの全体像を分かりやすく見渡せる「学びの地図」として、学習指導要領を示し、幅広く共有**

- これからの時代に求められる知識や力とは何かを明確にし、教育目標に盛り込む。これにより、子供が学びの意義や成果を自覚して次の学びにつなげたり、学校と地域・家庭とが教育目標を共有してカリキュラム・マネジメントが実現しやすくなる。
- 生きて働く知識や力を育む質の高い学習過程を実現するため、各教科における学びの特質を明確にするとともに、授業改善の視点（「アクティブ・ラーニングの視点」）を明確にする。これにより、教科の特質に応じた深い学びと、我が国の強みである「授業研究」を通じたさらなる授業改善が実現する。

## これからの教育課程の理念

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく。

### ＜社会に開かれた教育課程＞

- ① **社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。**
- ② **これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。**
- ③ **教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。**

## 学習指導要領改訂の方向性

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

### 何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、  
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

**「社会に開かれた教育課程」**の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

### 何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた  
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の  
新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造  
的に示す

**学習内容の削減は行わない**※

※講義教育については、態様な専攻的知識の増設が大学入 学希望者で開かれることが課題になっており、  
そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

### どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・  
ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得  
など、新しい時代に求められ  
る資質・能力を育成

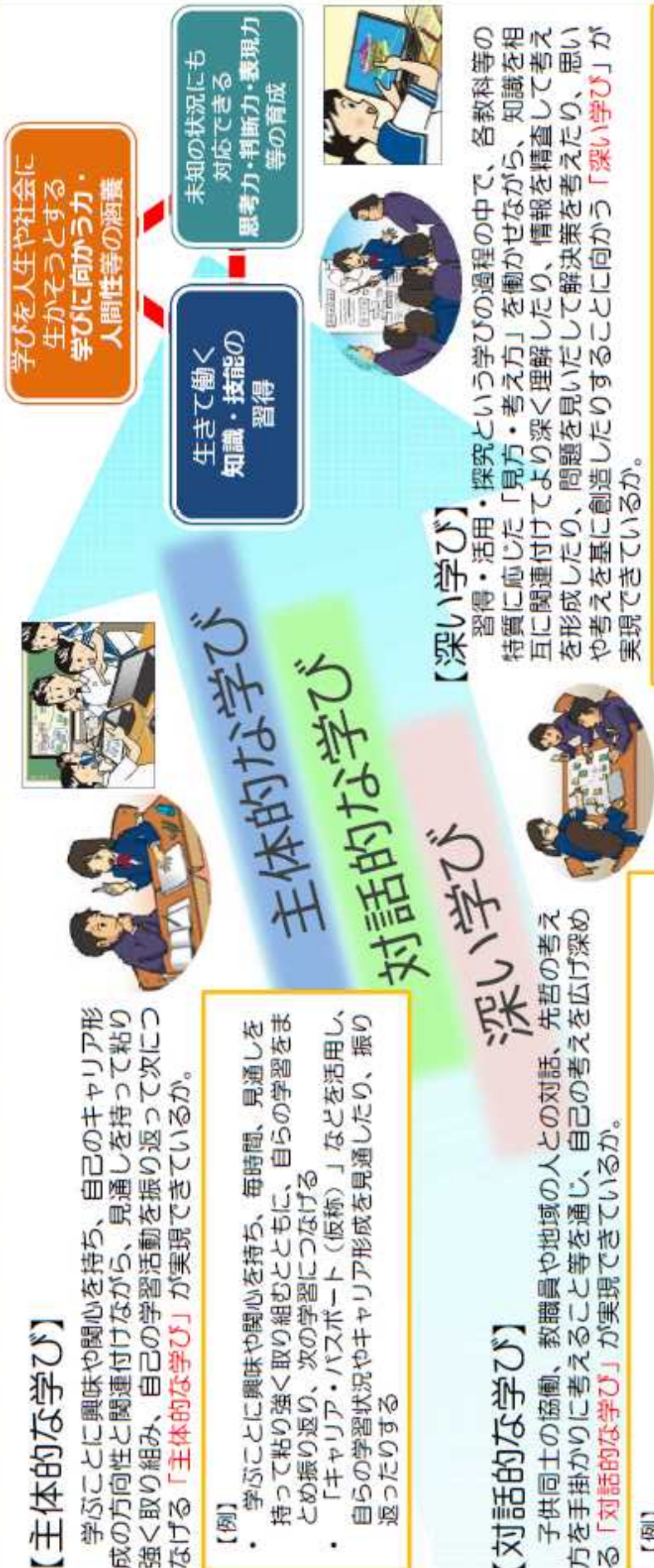
知識の量を削減せず、質の高  
い理解を図るための学習過程  
の質的改善

主体的な学び  
対話的な学び  
深い学び



# 主体的・対話的で深い学びの実現 （「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること



学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・  
人間性等の涵養

生きて働く  
知識・技能の  
習得

未知の状況にも  
対応できる  
思考力・判断力・表現力  
等の育成

- 【例】**
- ・ 実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすること  
で自らの考えを広げる
  - ・ あらかじめ個人で考えたことを、意見交換したり、議論したり、することで新たな考え方に気が付いたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする
  - ・ 子供同士の対話に加え、子供と教員、子供と地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る

- 【例】**
- ・ 事象の中から自ら問いを見だし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組み
  - ・ 精査した情報を基に自分の考えを形成したり、目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり、考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成したりしていく
  - ・ 感性を働かせて、思いや考えを基に、豊かに意味や価値を創造していく



## 令和2年度からの新学習指導要領（小学校外国語）について

### 学校教育課

#### （1）新学習指導要領における小学校外国語・外国語活動での学習内容

小学校では身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合う言語活動を行う。

##### ①小学校3・4年生「外国語活動」

- ・週に1時間、年間35時間
- ・評価は、児童の学習状況における顕著な事項を文章記述する。
- ・「聞くこと」「話すこと」を中心に、自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う言語活動を実施する。

##### ②小学校5・6年生「教科外国語」

- ・週に2時間、年間70時間
- ・教科書を使用し、評定（3段階）をする。
- ・「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」に慣れ親しむ活動も実施する。
- ・アルファベット大文字、小文字の全てを学ぶ。
- ・「書くこと」は、単語や文をなぞり書きをしたり、見本をまねて書いたりする。

#### （2）小学校の外国語担当者

- ・学級担任単独
- ・学級担任と「小学校外国語・外国語活動支援員」
- ・学級担任とALT（外国語指導助手）
- ・学級担任と「小学校外国語・外国語活動支援員」とALT

※学校によっては、校内の外国語担当教員が単独で授業実施

#### （3）対応

##### ①ALTの活用

- ・平成28年度よりALTを2名増員
- ・校区内の小学校を月に1回ずつ訪問し、学級担任と授業実施
- ・4名のALTが揃って学校を訪問し、授業や活動を実施

##### ②先行実施

- ・平成30年度および平成31年度（令和元年度）に全小学校で、3，4年生で週1時間、5，6年生で週2時間の授業を実施し、令和2年度の全面実施にゆるやかにつなげた。
- ・3年生～6年生の年間指導計画を市として提示し、全小学校での学習内容が同じになるようにした。

- ・先行実施期間中の教材を、市教委と各校の共有フォルダにデジタルファイルを保存し、各校が簡便に使用できるようにした。

### ③小学校教員対象研修

○文部科学省教育課程調査官 直山 木綿子（ゆうこ）氏による研修

- ・平成27年度～平成29年度
- ・新学習指導要領における外国語教育の目標や内容の伝達と模擬授業

○小学校教員対象の実践研修（倉吉イングリッシュ・シャワールーム）

- ・平成28年度～平成30年度
- ・年に2回ずつ（夏期休業中および冬季休業中）
- ・原則英語でのやりとりをしながら、授業で役立つ言語活動を体験したり、協力しながら授業づくりをしたりした。



○校内研修

- ・小学校英語教育推進リーダー研修を受けた教員が、校内で伝達講習を実施した。
- ・校内授業研を実施し、指導主事からの指導を受けている。

### ④小中連携

- ・中学校区ごとに、年に1回授業研究会を実施し、研修の機会としている。

### ⑤先進的な授業実践

- ・平成30年度、平成31年度に、外国語専科教員を配置し、新学習指導要領に対応した授業をしている。（明倫小、成徳小、灘手小）
- ・国事業の公開学習と合わせ、市内小中学校外国語担当者にも参加を呼びかけ、研修の機会とした。

## （4）平成30年度英語教育実施状況調査結果より

①「外国語活動の学習が好きな児童数」1,419名／1,590名中（89.2%）

外国語の学習が好きな児童が大変多いのは、小学校の先生方の努力による。文部科学省直山教育課程調査官（当時）もそのことを強調しておられた。

②「先行実施において、課題と感じていること、困っていることがあると答えた学校」13校

- ・授業作りや教材作成に多大な時間がかかる。
- ・ALTとの打ち合わせの時間が十分に確保できていない。
- ・先行実施期間中の文科省作成教材のうち、特に5、6年生用は難しかった。
- ・英語に自信がない。

これらの課題を少しずつ克服できるよう、市教委として支援していきたい。



## I C Tを活用した学習効果

学校教育課

### 1 背景

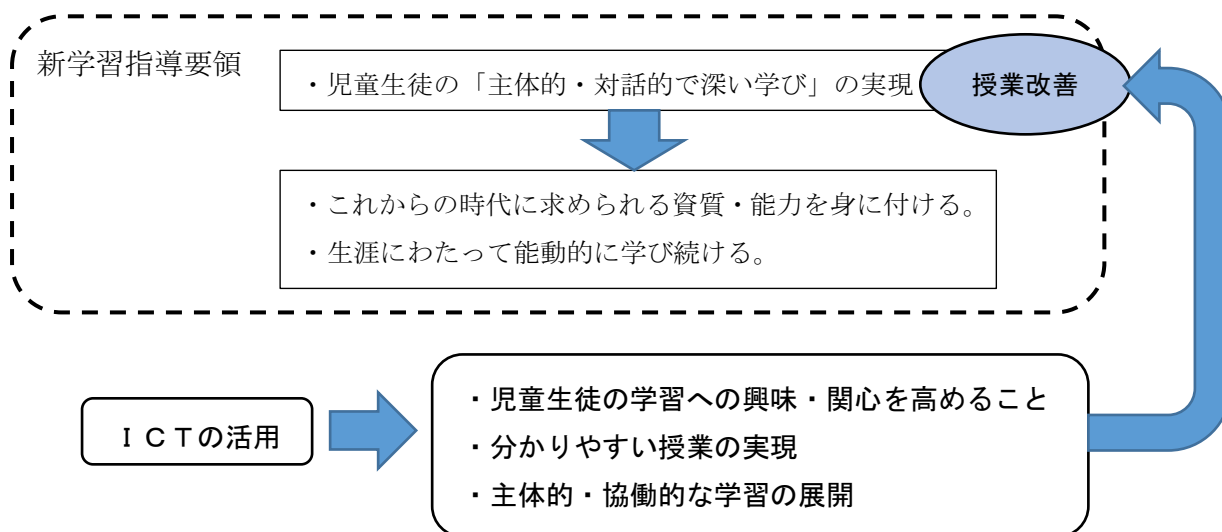
急速に情報化が進展していく社会の中で、情報や情報手段を主体的に選択し活用していくために必要な情報活用能力を、育成する重要性がますます高まっている。新学習指導要領では、情報活用能力が言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられ、総則において初めて学校のI C T環境の整備とI C Tを活用した学習活動の充実を図ることに配慮することが示された。

### 2 I C T機器を活用する学習効果

時間的・空間的制約を超えること、双方向性を有すること、カスタマイズが容易である。このような特長を効果的に活用することにより、

- ・ 児童生徒が分かりやすい授業
- ・ 一人一人の能力や特性に応じた学び（「個別学習」）
- ・ 児童生徒同士が教え合い学び合う協働的な学び（「協働学習」）

などを推進することが可能



I C Tを活用していくことは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に効果的であると考えられる。その結果、児童生徒が生涯にわたって能動的に学び続けるための資質・能力を身に付けさせることにつながっていく。

# 新学習指導要領のポイント（情報活用能力の育成・ICT活用）

○平成29年3月に小学校及び中学校、平成30年3月に高等学校の新学習指導要領を公示。

○新学習指導要領を小学校は令和2年（2020年）度、中学校は令和3年（2021年）度から全面実施。高等学校は令和4年（2022年）度から学年進行で実施。

## 小・中・高等学校共通のポイント（総則）

➤ **情報活用能力を、言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付け**

総則において、児童生徒の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）等の学習の基盤となる資質・能力を育成するため、各教科等の特性を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとすることを明記。【総則】

➤ **学校のICT環境整備とICTを活用した学習活動の充実に配慮**

総則において、情報活用能力の育成を図るため、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実に配慮することに配慮することを明記。【総則】

## 小・中・高等学校別のポイント（総則及び各教科等）

➤ **小学校においては、文字入力など基本的な操作を習得、新たにプログラミング的思考を育成**

各教科等の特質に応じて、児童がコンピュータで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得するための学習活動や、プログラミングを体験しながらコンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けるための学習活動を計画的に実施することを明記。【総則】

➤ **中学校においては、技術・家庭科（技術分野）においてプログラミング、情報セキュリティに関する内容を充実**

「計測・制御のプログラミング」に加え、「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング」等について学ぶ。【技術・家庭科（技術分野）】

➤ **高等学校においては、情報科において共通必修科目「情報Ⅰ」を新設し、全ての生徒がプログラミングのほか、ネットワーク（情報セキュリティを含む）やデータベースの基礎等について学習**

「情報Ⅰ」に加え、選択科目「情報Ⅱ」を開設。「情報Ⅰ」において培った基礎の上に、情報システムや多様なデータを適切かつ効果的に活用し、あるいはコンテンツを創造する力を育成。【情報科】

# 学校におけるICTを活用した学習場面

各教科等の指導でICTを活用することは、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や「主体的・対話的・深い学び」の実現や、個に応じた指導の充実に資するもの。

A 一斉学習		B 個別学習		C 協働学習	
<p>挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。</p>	<p>A1 教員による教材の提示</p> 	<p>デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易となる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。</p>	<p>B1 個に応じる学習</p> 	<p>B2 調査活動</p> 	<p>タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学习において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあう学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>
<p>画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用</p>	<p>B3 思考を深める学習</p> 	<p>B4 表現・制作</p> 	<p>B5 家庭学習</p> 	<p>C1 発表や話し合い</p> 	<p>C2 協働での意見整理</p> 
<p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p>	<p>B4 表現・制作</p> <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p>	<p>B5 家庭学習</p> <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>	<p>C3 協働制作</p> <p>グループでの分担、協働による作品の制作</p>	<p>C4 学校の壁を越えた学習</p> <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>	<p>C1 発表や話し合い</p> <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p>

## B3 思考を深める学習

シミュレーションなどのデジタル教材を用いた試行により、考えを深める学習を行う



### ICT 活用のポイント

1. デジタル教材を用いて、学習課題の試行を容易に繰り返すことにより、学習課題への関心が高まり、理解を深めることが可能となる。
2. デジタル教材のシミュレーション機能や動画コンテンツ等を用いることにより、通常では難しい実験・試行を行うことが可能となる。

### 具体的な学習場面

#### ▶ 形や色を楽しもう

長野市立塩崎小学校 第4学年 図画工作科

- 制作する皿の利用イメージを持たせるために、いちごを皿に載せたイラストの皿の色を変更することができるデジタル教材を児童がタブレットPCで操作し、皿の色による雰囲気の違いなどを自分のベースで試し、楽しみながら考えさせることができた。
- 各自で皿の色を決めた後に、その色を選んだ理由をグループで話し合わせることで、各自の考えを深めることができた。



#### ▶ かたちづくり

大府市立東山小学校 第1学年 算数科

- タブレットPCの自作ソフトを使って、与えられた影絵に三角形をあてはめ、何枚の三角形でできているかを各自のベースで調べさせることにより、興味・関心を高めることができた。
- 児童の学習結果をグループで見せ合ったり、電子黒板で共有したりすることにより、考えを深めることができた。



#### ▶ 三平方の定理の利用

新見市立哲西中学校 第3学年 数学科

- これから学ぶ内容に関係する既習事項として、1年生の単元である空間図形のコンテンツを学習者用デジタル教科書・教材から引き出して復習させることで、空間図形のイメージを持って学習に臨むことができた。
- 空間図形のイメージが理解できているため、その後、学習課題を電子黒板で共有して、考え方を確認する際に、課題への考え方についてより理解を深めることができた。



#### ▶ 遺伝の規則性と遺伝子

佐賀県立武雄青陵中学校 第3学年 理科

- 学習者用デジタル教科書・教材のコンテンツを用いて、マツバボタンの発芽実験のシミュレーションを各自で行わせた。各自が調べた結果や考えたことをグループで照らし合わせて、その規則性について考えを深めることができた。
- シミュレーションの数値をグループ・全体で合計することにより、個体の数が多くなれば統計上の理論値に近くなることを体感させ、学習内容への理解を深めることができた。





## C2 協働での意見整理

情報端末等を用いてグループ内で複数の意見・考えを共有し、話し合いを通じて思考を深めながら協働で意見整理を行う



### ICT活用のポイント

1. 情報端末を用いて、学習課題に対する互いの進捗状況を把握しながら作業することにより、意見交流が活発になり、学習内容への思考を深めることが可能となる。
2. 情報端末等を用いて、互いの考えを視覚的に共有することにより、グループ内の議論を深め、学習課題に対する意見整理を円滑に進めることが可能となる。

### 具体的な学習場面

#### ▶自動車会社をたずねて

葛飾区立本田小学校 第5学年 社会科

- 調査内容を効率よく整理し、発表資料をまとめるため、協働学習アプリケーションを活用して人気のある自動車に関して共有し、グループ内で意見を出し合った。
- 新たな気づきを促すため、発表資料を電子黒板に提示して発表し、他のグループの考え方と比較した。



#### ▶第二次世界大戦と日本

新地町立尚英中学校 第3学年 社会科

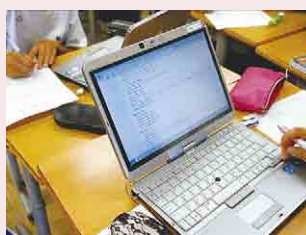
- 各自の進捗状況や内容の重複、過不足を把握して、調査内容の整理を円滑に進めるため、調査内容を協働学習アプリケーションに入力し共有しながら歴史上の出来事についてグループ内で分担して調べた。
- 歴史上の出来事の関連性について、さらなる理解を深めるため、調査内容をグループごと議論しながらまとめさせた。



#### ▶スポーツは文化-国際大会のルールや役割、動きなどを調べよう

上越教育大学附属中学校 第1学年 保健体育科

- 他の班員の分担部分に関係する情報を素早く引き渡したり、調査段階から関連事項への理解を深めるため、協働学習アプリケーションに記録しながらスポーツの国際大会について個々にインターネット等で調べ活動を行った。互いのテーマに関連した内容も収集し、調べて得た情報を随時交換した。
- 言語活動をより深めるため、他の班員の関連事項に関する意見交換も活発に行った。



#### ▶植物のなかまわけ

阪南市立三雲中学校 第1学年 理科

- 情報整理を円滑に進めるため、植物の進化過程に関して概念地図をまとめる学習において、各自が分担して調べた内容をタブレットPCに記録し、それぞれが描いた概念地図をグループで一つにまとめた。
- また、グループ内での集団思考を深めるために、各自の調査内容を比較する活動をさせた。



# 1. 倉吉市小中学校ICT環境整備の進むべき方向

新学習指導要領の全面実施を見据え、小中学校ICT整備年次計画による整備を行い、ICTを利用した教育環境の整備を推進する。

## 倉吉市小中学校ICT環境整備年次計画

- 令和2年度 小中学校全普通教室
- ・プロジェクター及びWiFiを整備
  - ・教員用タブレット(6~20台)
  - ・児童生徒用タブレット(2グループ分16台)
- 小中学校特別教室(理科室他)
- ・プロジェクター及びWiFiを整備

令和3年度～

小中学校パソコン教室パソコン更新

※小中学校ICT環境整備検討会議を毎年実施  
小中学校ICT環境整備年次計画は5ヶ年ごとに  
見直す

### 普通教室

### 倉吉市小中学校ICT環境整備計画



生徒の画面を  
分割提示して比較

先生の画面を  
ワイヤレスで伝送

プロジェクター

児童生徒用タブレット

教員用タブレット

教室Wi-Fiとして  
安定稼働

デジタル教科書

授業支援システム

カメラ画像

動画ファイル

特別教室への拡張

### 特別教室



体育館



無線AP



教員用タブレット



無線AP



特別 教室

特別教室への拡張を見据えたWi-Fi環境を整備

## 2. 学校が災害時でもWi-Fi活用を可能に

- 1・平常時はタブレットをWi-Fiに接続し、デジタル教材の提示や協働学習の実施に活用。
- 2・災害時はWi-Fiの開放や、災害情報の表示等に活用し、安否確認や情報伝達に利用する。

### 平常時

ICTを活用した効果的な授業を展開（セキュリティも考慮）

#### 普通教室・特別教室

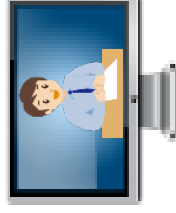


協働学習

一斉学習

個別学習

校内放送



#### 体育館

動画鑑賞

動画撮影・分析

### 災害時

避難所とした体育館や教室、校庭等において、Wi-Fiを避難者向けに無料開放

#### 特別教室



プロジェクター・テレビ

#### 【Wi-Fi無料開放】

#### 体育館



プロジェクター・テレビ

#### 校庭



#### 【災害情報の表示等】



## 倉吉市立図書館の新しい活動

### 認知症予防としての音読

倉吉市の高齢化率は31.7%であり、今後もその割合は高くなっていくことが想定されます。

図書館では、高齢化社会に対応するため、高齢者サービスを行っており、その一つとして、平成25年7月より音読教室を毎月開催しています。音読は認知症予防に効果があると言われており、音読教室の参加者も年々増え、好評をいただいています。

図書館の図書を使うことで、類似図書の紹介・貸出など、高齢者の読書を推進する良い機会になっています。

音読で使用する絵本等についての貸出も増えてきており、図書の充実を図っていきます。

今後も、高齢者の読書推進と、図書館をコミュニケーションの場として活用してもらい、高齢者の健康的な生活づくりに貢献するものです。



### 学生と大人のための英語教育支援

12月1日に開催した、多読に関する講演会では親子での参加が多く、講演会のなかでは3歳の女の子が講師と英語単語でやりとりをする場面も見られ、幼いうちからの英語教育への関心が高いことがうかがえました。英語（外国語）授業の小学校導入により学習熱の高揚も想定されます。

今年度は新たに英語教育に関する児童生徒を対象とした図書、保護者教員を対象とした図書、生涯学習としての英語学習を支援する図書等の購入を重点的におこない、

英語教育支援コーナーを設置しました。英語学習、英会話、英語指導、資格取得など内容ごとに分け配架しています。新たに購入した図書の利用率は高く、今後も英語教育支援コーナーの充実を図っていきます。



### 図書館における農業などの産業支援

図書館では、地域の産業を支援し活性化することを目的に農業をはじめとする産業振興に関する図書の提供をおこなっております。なかでも農業に関する問い合わせが多く、昨年度に2回、今年度に1回開催した農業に関する講座には多くの参加がある関心の高さがうかがえました。



## 倉吉市立図書館の新しい活動

館内には農業支援コーナーを設置し、栽培方法のほかに加工食品、商品開発など関連した図書を集めております。産業活性化のための課題解決向け、農業支援コーナーの図書やDVD等の充実を図っていきます。

また、図書だけではなく、農業と食生活に関する情報をまとめたデータベースを館内のインターネット利用端末で自由に見ていただくことができ、活用いただいています。現在は倉吉館だけの閲覧のみとなっており、せきがね館での閲覧はできません。せきがね館の利用者からも閲覧できるようにしてほしいとの要望を伺っており、せきがね館でも閲覧できるよう検討しているところです。



### 山上憶良短歌賞とまちづくり

平成24年に創設した山上憶良短歌賞は今年度で8回目を迎え、今では全国から5,000首を超える賞に成長しました。この事業は、市民の地域に対する誇りと愛着の醸成、地域づくりへの意欲の高揚を目的の一つとしており、民間団体、民間ボランティアと協力して実施する短歌教室、山上憶良を知る授業のほか、山上憶良・土屋文明歌碑の建立、やしろ五輪まつり・社地区文化祭への参加、支援団体山上憶良の会の結成、さらに同会主催事業への協力などを行った結果、伯耆国守山上憶良の知名度は次第に上がってきましたが、まちづくり活動への波及はまだままだの状況です。今後も継続して事業を実施します。なお、表彰式などは交通の便を考え倉吉交流プラザで行う予定です。

### 図書館へのICT機器の導入

図書館は本館に利用者用端末を設置しインターネット情報を提供していますが、大人用2台と子ども用（高校生以下）1台と台数が少ないため利用時間が30分と短く、またメモ用として整備したため設置場所も狭く、学習・調べものには不便です。このため、この際端末を増設することとし、また端末としてはキータッチの音もせず、また移動が容易で座席の有効活用ができるタブレットの導入を考えています。

一方、中高校生・短大生はほとんどが電子辞書を活用しており、また最近は電子体のみ市販する辞書・図書も珍しくなくなっており、今後もその傾向が強まると予想されることから、図書館も電子体の辞書・図書を提供する必要が高まってきています。このため利用者のニーズを確認しながら順次ICT機器と電子辞書・図書を導入したいと考えています。

※参考資料：「高1読解力15位に低下」（日本海新聞 元・12・4）

他のOECD加盟国（79カ国・地域）と比較して、わが国の高校1年生はデジタル機器の使用が特に少ないため、読解力に劣るという問題点を指摘。